

# ルポルターージュの今日的課題

取材現場に思うこと

今 崎 暁 巳



私たちは、物質的にも精神的にも、多様で便利で、一見物溢れ、従って豊かという表現が国中にまかり通って不自然でないような社会状況にこの二十年ほどおかれてきた。だが、ここ数年、政府、マスコミの使う『豊か』という表現をひっくり返して考えざるをえない事実が、生活現場に続出し始めた。われわれ自身の努力で、一応の表現の自由が育ってきた現在の時点を念頭において、あらためて思う。日本人の暮らした豊か——そういつてきた政府、独占企業の公式表現の信憑性そのものが問われる時代に、今さしかかっている

と。  
先日、横浜港で、主婦と農民が埠頭に野積みしてある輸入商品を見学する現場にいて気がついたことがある。この行動は、政府主導のアメリカ農産物輸入自由化に生活の危機を感じる人たちの学習活動ということであり、それは、決して希望溢れ、明るい事柄とはいえないかもしれない。テレビ、新聞、雑誌などが、つきつぎに野積み現場を見学し日本各地からやってくる訪問者に焦点をあてることは「赤旗」などを除き、ほとんどない。

だが、今まで知らされることのなかった、輸入原材料の扱い、商品化の事実を知ることにより、農民の眼にも、主婦の表情にも、怒りとともに、真実をとらえた歎び、明るささえ、浮かんできた。保管料を安くあげるため、五年六年と野ざらしにされた、農薬だらけの中国産ラッキョウ……風雨に曝され、白くふやけたその姿から桃屋の花ラッキョウに変身している眼の前で、わらびを積みこむ長野県ナンバリーのトラック、ピーナッツを積みこむ千葉県ナンバリーのトラック。それぞれ町の加工工場に運ばれ、やがて、スーパーや観光地で、信州山菜づけ、千葉特産ピーナッツの商標をつけて並べられ、日本の消費者をあざむき、農業をつぶし、生活を荒廃させる、この仕組み。米日安保体制のしがらみで日本農業を犠牲にし、国民をあざむく真相を知った国民が、その場から新しい行動を開始するのだ。

〈虚偽と支配の情報に抗して〉

「高度成長」によって変容し、「豊かな社会」になったと、

政府財界が説明してきた、現在の日本について、その立場にたつ、吉本隆明氏は「日本の先進資本主義が賃労働者の週休二日制の完全実施を容認する傾向にあることは、百年まえのマルクスが見聞したら、驚喜して祝福したに違いないほどの賃労働者の解放」と説明し、ヨーロッパとの比較も、「高度成長というのは、近代の最終過程であつて、それはすでに日本は欧米と横一線にならんでしまったからだ。つまり、欧米はもはや日本にとつての理念型の意味をもたなくなつてしまつた」（松本健一「風景の変容」、八三年一月）ということになる。だが、その目線を大半の勤労者市民の生活におけば、「確かに『高度成長』によつて日本経済は大きく『発展』をとげた。しかしそれはあくまでアメリカに従属した独占資本本位の『発展』であつて、この『発展』のもとで、現に国民の多くは深刻な生活の不安を強いられている。（中略）『豊かな社会』は多くの国民の側からいえば、作られた虚像にすぎず」（佐藤静夫『言葉と物語』）という、事実認識・時代認識の決定的違いが鮮明になる状況であること。まさに、今ほど、事実の信憑性そのものが、一人ひとりの人間の生活の立場から問われるようになった時代はないのである。

例えば、現代の話題の一つ、農業農村の危機について、取材中の事実を紹介しよう。

今、新聞・テレビの中心的報道は、牛肉・オレンジの輸入自由化を軸に、将来は、米の自由化も含め、日本農業の保護育成そのものをやめ、価格・経営競争に耐えられる一定規模以上の専業農家だけが残つて当然といった論調がまかり通つている。新聞ルポも文学的表現も日本農業の体質の弱さや脱落する農民の暗い状況を伝える場合がほとんどである。

政府財界の深部の意志として、*「自民党の都市型政党への変身」*がいわれ、前川レポート、大前研一氏の*「効率・付加価値」*優先、農業農村切り捨ての国づくり論が罷り通る。

だが、都市、農村の生活生産現場で、この米日支配層の進めるドラスチックな農業農村切り捨ての状況をつぶさにみ、農民と語りあう時、資本と支配層の描く、農村社会変容の近未来図と異なる、農民、都市生活者の考え方、行動が浮かびあがつてくる。

養蚕専業から畜産関連企業に転職した夫にかわり、野菜作りを始めた、茨城の農家主婦が私に語つた。初めて、東京の生協組合員のために、産直、有機の野菜を年間を通して出荷するようになった思いをこめて。

「家族のためにいい野菜を作る気持で、東京の奥さんたちの希望に応えるように……」

初めて年間、産直出荷をした喜びを語る。

「桑畑、牧草地、野菜畑……有機肥料いれて、土づくりして、トマト、枝豆、ほうれん草、小松菜と、時期時期の野菜をだんだん増していきました。少し恰好悪くてもいい野菜作れば、東京の奥さんたちは喜んでくれます。市場では農薬使つてまつすぐなキュウリでないとお金になりません。……一年作つて、百万ちよつとの収入になりました」

さらに、眼を輝かしていった。

「パートだとこんなに稼げんし、子どものことも心配……野菜づくりなら、おじいちゃんにも手伝ってもらえるし、なにより、東京の人たちに喜んでもらえるのが嬉しくて……」

自民党農政が生んだ農業危機の中で、夫が農業を離れる苦

悩の中で、妻が家族、消費者をつないで始めた、新しい生活協同の野菜づくり。安定した農業経営の可能性を切り拓くのは容易なことではないが、政府の指導する小規模営農や二種兼業農業は切り捨てということには簡単にならないし、大前氏たちのいうように、効率の悪い都市周辺農業はやめてということにもならない。

形は二種兼業小規模野菜づくりから始まって、大都市生活者にとつて、農薬づけでない質のいい野菜づくりをする農業、豊かな自然のある農村地域がなくてはならないものとして自覚され、都市農村それぞれの生活者を本当につなぐ運動がおこり、広がり始めていることが重要なのだ。

大切なことは、世界に例をみない速度、規模の高度経済成長、大資本による利潤優先の生産性向上がつくりだした、国民生活のひずみが、今、あらゆる生活現場で顕在化し、たまたかいつつ自らの暮らしを自らの連帯行動で守り育てる行動が全国の各地各職場に芽生え、育ちつつある事実なのだ。そして、政治的には、戦後第二の反動攻勢期といわれる、自民党政府・大企業による労働者、市民の権利侵害、生活改善の動きに対して、新たな連帯行動、生活行動を起こさざるを得なくなっている現実を見分けることのできる私たちの物の見方、世界観が重要なのだ。

国民生活を犠牲にして進められた大量生産に対する公害反対、環境を守るたたかいから始まり、現代の米騒動といわれた、石油ショック時の主婦たちによる大企業のものかくし摘発のたたかい、働く親たちの子育て、学童保育運動、テレビづけの子にいい芝居を見せる親子劇場運動などなど、かつては想像できなかった、新しい生活破壊に対する抵抗のたたかい

が進んだ七〇年代。そして、八〇年代に入り、行政改革という名目で進められた、国労つぶし、労働組合いじり。そして、老人医療、保育制度の改悪に反比例する防衛体制・安保体制の強化、予算増額。君が代・日の丸教育復活を軸に進められる教育の非民主化、画一化、現在焦点となっている、国民多数からの収奪をすすめる大型間接税制度の創設など、農業農民切り捨てを含め、今や、国民各階層の生活の中に、自らの連帯努力で、政治経済のありようを変え、生活を変えなければならぬという現実がぬきさしならない段階になっているということ。

#### 〈生活は国民の豊かさの尺度でこそ〉

私たちは、医療・教育・福祉・住宅・文化など、身のまわりの生活を一層不安定なものにする状況とたたかう中で、政府財界がいい続けてきた、日本は豊かになったという評価そのものが、まず、その信憑性をとられる事態を問題にしなればならない。

「GNP一位は嘘でなくても、国民一人ひとりの暮らしになると、大都市では土地も家も持てない、教育費は高い、医療も金がかかる、老後の保障も程遠く、レジャーも高速道路も金、金、金……いったい、どこに豊かな暮らしが日本にあるのかねー」

全商連主催の学習会で、ある小売業者の人が発言したことは、まさに、私たち日本人の暮らしを正確にとらえた表現だった。私は、その時、二年つづけて見てきた、日本よりはGNPが低くても、市民生活水準は遥かに高いイタリアの現実を紹介した。一昨年春、NHK特別番組『世界の中の日本シ

リーズ”の中で、イタリアの労働者市民が「時間を豊かに使う」暮らしを報道したこととあわせて。

「イタリアでは、夜は働かないで、時間をとても豊かに使います。そして、物価が安く、家の広さは日本の三倍です。病気になるってお金がかかりません。ですから、イタリアではお金が残ります」

番組の中で、主婦として語ったイタリア人口ザンナの表現は、イタリアの民主主義運動の努力が生みだした社会保障の充実度を語り、住民生活中心の「豊かさ」観を率直に口にしたものだった。

ブラウン管に映し出された六時間労働、通勤（片道）二十分、夏休み四十日という市民生活のいかにも楽しそうな表情とともに、「日本は国が豊かでイタリアは国民生活がずっと豊か」といっきつた彼女の物の見方、生活観は極めて説得力をもっていた。比べて、「日本人は働き者だから、遊び者のイタリア人とは違う」と発言した日本経営者の代理人、評論家山本七平氏の言葉は、予想以上に色あせた感じを視聴者に与えたようだ。つまり、国際的な現実からみても国内の生活感覚からみても、山本氏のたたえる日本の企業生活礼讃、豊かさ礼讃は説得力に欠け、ある女性視聴者の表現によれば、「大企業と一緒に嘘をつく」ということになるのだ。

彼女が怒りをこめてそっくり切る前提には、大企業M電器に勤める夫が、ウィークデーは毎晩十二時を過ぎての帰宅であり、子どもと食事することもしやべることもできない「暮らしの荒廃」が重く、つらくあるということ。

「マスコミも、時には、財界や政府の顔色を見ない報道をすることがあるんですね」

あの番組のお蔭で、たまの日曜、子どもと遊ぶ必要を、夫に納得させることができました、と感激して話す日立社員の奥さんの言葉を聞いていて、あらためて、日常的に、マスコミの報道・文化が支配・管理され、国内外における民主主義的日常や市民の生活の実態について、ほとんど真実が伝えられていない情報化社会の恐ろしさを思った。国内外の、自由と民主主義のある暮らし、たたかい、世界がほとんど伝えられていないのだ。

高度成長の先頭に立つ大企業労働者の長時間労働・長時間通勤に関連して、私は、間もなく出版される「日本プロレタリア文学集・ルポルタージュ集」（新日本出版社）の解説を書きながら、大きな発見をした。そこに収められる一九二〇年代、日本労働運動黎明期に、藤森成吉が北海道から浜松まで、六つの労働現場で労働体験をして書きあげた「狼へ！（わが労働）」の中で、すでに、今回に通じる「豊かさ」の中の「貧困」を見事に喝破する提言を行っていたのである。「狼へ！」の最後にいう。

「この労働時間の問題は、実に何にも増して労働問題の核心を形づくる。賃金問題も、労働者の自覚乃至向上問題も、これを度外視しては一の実効もない。（中略）時間の搾取！……この重大な、然も炳然として火よりも燎かな事実を、何故日本の学者や識者は、今まで第一に強調していなかったか？」

一九二〇年代に作家藤森成吉が指摘した、日本資本主義の恥部が、GNP世界一位の生産性向上の中でもなお、解決されていない事実が問題なのだ。

「大企業経営の人間の『貧困』を見すえて」

農業農村、ヨーロッパの市民生活のとらえ方につづき、藤森提言に関連し大企業労働者の生活のとらえ方に触れよう。

つまり、企業によって管理支配されているように見える労働者の仕事・生活の質がとわれ、家族ともども二四時間、三六五日人間らしく暮らす生活の中身が、国際的にも歴史的にも問われる時代状況になっているということ。

例えば、経営合理化と、たたかう国労つぶしをかかげ、あらゆる反労働者労務管理を強行したJ R経営者のやり方は、労働基本権が確立し、市民生活が一層充実してきたヨーロッパ諸国の労働者には想像もつかない蛮行であり、人間的進歩、民主化の流れに逆行する非人間的行為であることをいわなければならぬ。従って、この人間的国際的良識に従って踏みとどまった四万人の団結を抹殺することはできなかったし、小説「紀伊小倉駅にて」(樋尻雅昭作、「文化評論」八年三月特集号)に描かれたように、むしろ、非人間的弾圧差別の中から、人間らしく働き、地域住民と手を結びあう、労働者の新しい生き方が自覚され始めている点こそ、注目する必要があるのだ。

抵抗しつつ、新しい人間生活のありよう、新しい世界が創り出されていく事実が私たちには重要なのだ。国内では罷り通っているように見える、限度をこえた労働者支配が、世界の進歩の流れに、間違いなく逆行している認識をもつことの大切さ。

保険から金融競争へと、凄まじい合理化・変容を遂げつつある損保大手企業で、一万人の組合員が全損保労働組合のア

ンケートに答えて告白した中からその一文を紹介しよう。働き始めて間もない「新人類非組織人間」と呼ばれる二十一歳の営業女性が、たたかう組合のアンケート運動に、こんな文章を送ったのだ。

「予算がなんだ、シエアがなんだ。

みんな人間だもの、みんな生きてるんだ。青い空を見あげような、日の当るうちに家に帰ろうよ。家族と一緒に夕飯を食べようよ。

男の人を、営業男子を助けてあげて下さい。これ以上、男の人を苦しめないで下さい。会社っていったいなに？

日本人は可哀そうだ。ただただ働いて、会社はなにもしてくれない。

生きている時間をもつたいない。

私が思うこと——もっと自分の意見をいいたい、もっと強くなりたいたい。

一人で闘おうとするつづきされる。だから何かがおかしいと、みんなが気づくこと、そして、つらいから、しんどいから、しかたないと、逃げないこと。

私たちは人間だ。」

大切なことは、民間大企業で当然のこととして進めている人間的自由抹殺の職場生活づくりにむかい、企業を信じて入社してきた「新人類世代」の若者たちが、かつてロシアの貧困の中から同じ言葉を全存在をかけてうたいあげたゴーストのように、「私たちは人間だ」と声をあげ始めた事実。大企業経営への批判が、今の若者の感覚で、彼等自身の言葉で、少なからぬ働く同世代の胸に共鳴共感を広げつつある事実。

しかも、「自己中心」「団結不毛」といわれる青年労働者が彼等の言葉で懸命に求める労働生活の中身は、一九二〇年代、作家藤森成吉が北海道から浜松まで六つの労働現場体験を通して結論づけた「時間短縮」そして「人間的自由の確立」というテーゼそのものである事実が重要なのだ。

GNPが一位になり、大企業社員所得額面はアメリカ労働者のそれをぬき、車・情報化機器の所有、利用など、文化水準は高いという日経連の宣伝にかかわらず、ヨーロッパでたたかいかちとってきた、職場の基本的人権や時間短縮の課題が独占資本と追隨する労働組合幹部グループによって、極めて低い水準に抑えこまれてきた事実が明らかになり、労働者市民の新しいたたかい、生き方が生まれ育ちつつある現実に光を当てる仕事、今、われわれのノンフィクション、ルポルタージュの重要課題として浮上してきたこと。第二次大戦終結後かちとってきた（制約はあるが）自由と民主主義によつて、基本的に軍需生産でない高度経済成長を可能にしてきた、この一見複雑でとらえ難い日本人の暮らしの貧富の状態。一生働いて都心の一坪、二坪の土地が買えない異常な土地高騰、住宅ローンに停年まで拘束される労働と賃金、物価の関係、さらに、労働組合がつぶされ、共産党員が排除される職場など、遊びや触れあい、人間関係も奪われる子ども老人の状況も含め、行動を起さざるをえない現実——この現実を新しい民主主義と生活変革、創造の立場で正面から描く、新しいルポルタージュ、文学が、今われわれに必要なのだ。

「組合（同盟系）も、出向や合理化が大変で、署名のことも生協のことも文句をいわなくなりました。」  
ニッサン住宅の主婦がいう署名とは、返子米軍住宅建設に

反対する署名のこと。彼女はつぶされた生協の班を復活させ、池子署名に名を連ね、いきいきと、地域に住むさまざまな婦人たちと混りあいの暮らしを始めたのだ。

「この前の選挙の時、民社党候補への票の依頼に訪ねてきた同盟の人に、夫もはつきりいきました、誰にいれるかは自分で決めることです……」

#### 〈危機と可能性は背中合わせ〉

日本人が現在、政治的にも経済的にも軍事的にも、極めて不安定で危険な生活環境に日々を過している現実をドラマとしてとらえるため、横須賀ベースと駐留軍労働者取材した中で、私たちが危機と可能性、紙一重の状況に生きている日常の事実につきつきと遭遇した。

「横須賀・佐世保などの在日米軍基地などで働く日本人従業員に対し、軍事秘密の保持・防諜を理由に、ウソ発見器による調査を求める動きがあることが、四月八日に横須賀労管から入手した下記の文書で明かとなり、一部職場においては、承諾を求める行為が強行されてきました。」（全駐留軍労働組合文書より）

「核」持ちこみ、イージス艦など最新鋭原子力機器の機密に神経をとがらせ、米軍が全従業員にウソ発見器の使用を義務づける行為を強制してきた状況をつかむのが目的だった。

経過は、全駐留がとりあげ、共産党・社会党が国会で追及し、完全撤回はできないまでも、本人の自由意志にすることを約束させ、プライバシーの侵害や転勤などの不利益になる行為に歯止めをかけることができたのだが、その間の事情をきく中で、基地で働く日本人や、横須賀はもとより、神奈川・東

京の住民がおかれている、こわい状況が浮かびあがってきた。「もし、核」の事故が横須賀で発生した時、どれほどの被害がでて、消防体制がどうなっているか、知っていますか？」ある新聞記者に聞かれ、その実態を教えられ、日米安保体制の下ではそうであろうが、なんともひど過ぎ、慄然とする状況に、二の句がつけなかった。

まず、防衛庁は、「核持ちこみ三原則」は守られているという建て前で、従って、消防体制は必要なしとする立場。さすがに、横須賀市・神奈川県は、「核」事故有事の際の体制を検討し、体制をとり始めているということ。では、横須賀市の消防本部がどんな体制をもっているかだが、なんと、被曝時の作業服や、検査機器も十五ずつありますという答え。つまり、消防士十五人だけが、原潜なり、原子力空母なり、現場へとんでいけるということ。それでは、どうしようもないだろうということ、最悪の場合は、チェルノブイリのように、危険覚悟で、消防士は犠牲的精神で現場に入るといふ公僕としての言葉が返ってきたのだ。

駐留軍労働者に話をきいて、さらに驚いたのは、ベース内の消防作業に従事するのは、ほとんど日本人従業員だということ。「核」持ちこみなしという建て前で、訓練は通常の火災などに対してだけなのだが、もしもが現実になった状況を想定して、啞然とした。

「そうです。ベース内の事故現場に駆けつけて作業する消防関係者は、市もベース内も、みんな日本人だということですよ。アメリカ人には少なくとも、核」事故現場に、消防作業で駆けつける義務を負った人間はいないというわけです」そして、五月に来日した、米カリフォルニア大学教授ジャ

クソン・デービス氏の証言によれば、被害が少なくとも死者だけで七万数千人、横須賀から横浜、東京にかけて南風によって発生するというのである。

私はウソ発見器から始まり、「核」有事の際に神奈川県・東京住民の置かれている状況を事実にくしくして知ることにより、ものを書く人間としても住んでいる人間としても、生命の危機と背中合わせの私たちが、生きぬく可能性について現実の問題として改めて考えざるをえなかった。神奈川県民、東京都民をとわず、沖繩と連動し、日米安保「核」基地日本の中核、横須賀港を徹底的に生命と生活の立場から監視し、摘発し、最低限「核基地」ヨコスカをとり払う大運動を起すことが、今、二つの自治体に生きる住民のコンセンサスになりつつあり、そうしなければ未来はないということ。

そのことを考えている眼の前で、海上自衛隊の潜水艦が釣り船を沈没させ、三十人の犠牲者を出す大事故が発生した。「海の銀座」といわれるほど船舶通行量の多い浦賀水道で「そのけ、自衛艦のお通りだ」と、民間船舶の聲を聞いていた中で、必然的におこった市民見殺しの大惨事。沈んでいく人を助けることをしない日本の自衛隊員、と米軍関係者にまでいわれる仕末。しかも、横須賀海上保安部への連絡には二十一分もかかったのに在日米海軍司令部への連絡は数分でできたという、日本自衛隊の徹底的な、「国民軽視米国重視」の体質が、国民の面前、マスコミもとりあげざるをえない状況で起こったことは、事実を明らかにし、「核」兵器を廃絶する運動を進めようとする人々には、「平和・安全と自衛隊米軍の関係」についての大変つらいが真実を知る絶好の学習の機会となったのだ。

“生活・生命の危機が多く、勤労者市民に自覚され、平和・自由・民主主義のたたかひの輪に結ばれる時、背中合わせの危機とたたかう人々の生活に、大きな希望と可能性が育ち、急速に、新しい世界を作り始める。”

今“核と基地”をめぐる、逗子・三宅島の状況に横須賀・厚木基地をつなぐ、米日安保ネットワークの全貌が急速に、東京・神奈川住民の意識にのぼり、この危機状況を住民一人ひとりの手のつなぎあいできなく、かしようという行動の輪になりつつある点が重要なのだ。

危機とたたかう人々の連帯がつくりだす、平和で自由で人間性豊かな暮らしのありよう、世界に光を当てること、——それが、私たちのルポルタージュ、文学の現在最も必要な姿勢、課題だと考へる。

この視点で、生活とたたかひの日常をみるならば、生活の危機に直面して行動を始めた消費税反対の人びとの輪の中に、初めて、家計簿を分析し、税金の現実を知り、リクルート株のもうけ頭が竹下首相など自民党、中間政党政治家である事実が目覚め、初めて署名行動に参加する女性たちが急速に増えている事実が見えてくる。

### 〈新しいたたかひ、世界に光を！〉

私は、とりわけ、この数年、日本の各地各生活の場に、急速に、自民党政府、大企業、保守的地域組織などの常識ではとらえ切れない勤労者市民自身の新たな生活行動、新たなたたかひの行動が広く深く広がっている事実を見ている。それは、農村であれ、過密都市であれ、基地周辺であれ、どこでも誰でも、自由で、平和で、民主主義的な暮らしを求め行動

している点では共通している。この事実を見れば、戦争のない、自由で豊かな新しい生活、世界を目指し、つくることこそ各地各人の行動だといえる。それぞれの町、それぞれの土地における、住民勤労者自身による、アメリカ、日本政府、独占大企業などの支配に抗して、たたかひ育てる新しい生活づくり、世界づくりなのだ。

三宅島そして逗子で深く根をはる、米軍軍事施設の建設に反対する住民の連帯、自治活動は、その最もわかりやすい“住民自らの生活づくり”、日米安保条約にも屈しない“私たちの町づくり”そのものだとすることができ。いずれの土地も、世界にも珍しい生態系、あるいは、首都圏住民に残された自然の楽園という、もはや、人間が人間である限り手をつけてはいけな自然・社会環境を守る住民運動の性格をもつてきていることが一つ。そして、二つ目には、三宅島に米軍機のタッチアンドゴーの訓練基地を作ること、自然破壊とあわせて、豊かな漁業資源を滅ぼし、住民の生活基盤を破壊することを意味している。逗子米軍住宅というならば、横須賀・厚木をつなぐ、米“核”戦略基地を強化することと合わせ、子どもたちが育ち、人間らしく生活する緑、動物の世界を永久に破壊することを意味する。生産優先、軍事優先の高度成長社会が日本人とりわけ子どもたちの身体、心ともに育てず、破壊する因果関係を、大人たちが知ってしまった以上、経済手段の破壊へのたたかひとともに、三宅のおかあちゃんたち、所得水準全国四位といわれる逗子家庭婦人たちも、一歩たりとも、米軍、防衛庁に足を踏み入れさせないスクラムを組んで、私たちの町づくりを進める。

大切なことは、抵抗し、力を合わせる日々の体験の積み重



ねの中から、「核」と「米軍」を拒否し、自衛隊、横須賀、厚木という戦争につながる地域や全国の仕組みに気づき、この危険な環境、日常を変えるためには、逗子を、横須賀を、三宅島を、まず私たち自身の協力連帯で、平和な町にしようとする行動する人々が育ち、新しい暮らしづくりが始まり、広がる事実である。この人々の新しい暮らしよう、日々のありよう、人間の暖かき、美しさ、よさに光をあて、新しい生活と人間を描く、新しいルポルタージュ・文学の世界を確立することである。

このように、日米安保体制の下、日本に独占資本中心の高度情報化社会を作ろうとする政治的経済的文化的支配に抗して、自由で平和で民主主義のある暮らしを作ろうとする、新しい人間連帯、世界は矛盾が激発しているかに見える。東京・神奈川・沖縄・北海道などの地域に限らず、今、全国各地各職場で、今まで見たことのない、新しい人間連帯のありようとして行動が起こっている。こうした傾向を、私たちは新しい社会現象として見抜き、位置づけ、人間性と未来を育てる、どんな小さな可能性にも光をあてる仕事、私たちに課せられている。

この視点で見れば、新しい連帯の輪、行動の輪が、危機に立ちむかう日々の営みの中から見えてくる。私が取材先で出会う状況だけでも、一つ一つどれも、現在の政治経済福祉教育文化それぞれの矛盾が深くからみあい、人々が人間らしい生活を求めて行動を開始し始めた姿が明確に見えてくる。

農業の危機について、政治への反映を見れば、私が東北の農業界の農協組織から講演を依頼される眼の前で、宮城県古川市の市長選で、急遽、アメリカ農産物輸入自由化反対をか

かげ、共産党推薦で立候補した候補者が、自民党・中間政党の推した候補に勝つ状況が発生した。関西の和歌山、奈良などでは、大阪、京都など大都市部住民と農民との、生産消費提携の産直運動が前進する状況の中で、政治的には県議選、衆院選に地殻変動が起こる現象も現われている。

日本政府が、牛肉・オレンジ自由化で示したアメリカ政府への全面屈服の姿勢が、米に進み、農業農村切り捨ての方向が一層鮮明になる時、今、農村の深部を動かし始めている変革への流れはさらに大きくなっていく。

教育にも、自治、学園づくりの息吹きをみる。東大大学院大学構想、私立大学も含めた新テスト体制、国家主義的管理教育の強化、偏差値受験産業体質の強化など、教育人づくり体制がもつ、遂に両親祖父母を虐殺する「普通の子」を生むほど、非人間的な管理支配状況の深化の中で、各大学に見られる教職員学生の自治、生活協同の再生、創造の傾向の中にも、明らかに七〇年代までの学園の状況と異なる可能性が見えてくる。

昨年、「朝日新聞」、「赤旗」が大きくとりあげた名古屋大学における、教授会、教職員組合、学生自治会、大学生協、それぞれの良識が力を寄せあい、ヒロシマ・ナガサキそして核廃絶への学生の願いを契機に、四年間の努力の積み重ねの末、つくりあげた「名古屋大学平和憲章」は、教育の反動化、独占大企業の支配を拒否する、日本の大学人自らが学問の自由、平和、自治を高らかに宣言し、行動する、かつてなかった学園自治の素晴らしい到達点である。研究者も学生も職員も、「大企業の仕事はしても、戦争のための研究、仕事には協力しない」と、日本の大学の歴史にかつてなかった意志

表示がそこにある。

名大に限らず、北海道、東北、関東などの国立大学を軸に、新たな中央集権、国家統制的教育状況の深化、そして、産学協同への危機を自覚する中で、それぞれの自治体、学園の自治を深め、築く新たな教職員学生の連帯が芽生え、形をなしつつあるのが、特徴的な社会現象だということができる。

私が、名古屋大学および中京地域の取材をしている時に行なわれた、私立高校教職員と学生父母共催の三万人の文化の集いなども、現在の教育子育て状況の苦悩の中から、当事者すべてが、力を寄せあい、初めてお互いの人間の絆を文化表現の形で確かめあえた、新しい人間連帯の成果と呼んでいる。

初めに提起したように、上から支配管理している自民党政府、独占大企業、支配的マスコミで通用している物の見方、情報ではとらえられない、新しい生活行動、連帯行動が、社会現象といえるほどに、各地各生活現場に芽生え、広がりがつつある現実が問題なのだ。そして、この新しい社会的行動、人間の連帯行動、生活行動が今、なにを日本人の生活の中に生み育てつつあるのか、この新しいわれわれの民主主義的視点に立って、職場地域家庭を貫いてとらえる日常的情報、文学的文化的表現が、私たちの周囲に不足していることが問題なのだ。

現在の新しいたたかひ、世界をとらえる上で、ここ数年ヶ月、日本プロレタリア文学集の「ルポルタージュ集」をまとめる作業の中で、私自身も明治末期以降、細井和喜蔵「女工哀史」、藤森成吉「狼へー」（わが労働）などに代表される、民主主義受難期のルポルタージュ・ノンフィクション（当時

は報告文学と呼ぶ）生みの苦しみの跡をたどりながらあらためて思うことがある。

事実が事実としていかにあるかを描くことが次第に困難になっていき、小説の表現すら削除、伏字を強制された、あの自由のかけらも押し潰された時代に、なぜそうあるのか、どう変革するかをとらえ、描くことに努力した先輩作家たち——あの人たちが、時代と世界の必然の流れをとらえ、日本の現実の矛盾に立ちむかい、ファシズムの嵐の中に自由と民主主義を目指す自らの連帯、世界を求めつづけた事実を知る時、私たちが、今、なじうるし、また、挑むべき、新しい世界づくりのためのルポルタージュ・文学の課題が鮮明に浮かんでくる。

東京の独占大企業のオフィスの中であれ、横須賀港の基地の周辺であれ、学園の孤獨な学生のたまり場であれ、西武資本に買収され、鉄道もなくなる北海道大雪山麓の農村であれ、そこに生き、仕事をつづけて、子を育て、隣り近所の暮らしを、町の暮らしを、自分たちの手のつなぎあいで、生活・平和・民主主義建設の合意形成によって乗り切ろうと、創り出そうと、営々と日々の営みをつづけている多くの私たち日本人の暮らし——第二次大戦後、四十三年の民主主義の蓄積、到達点を私たちの世界としてとらえ、高度経済成長から高度情報化へと一層、高度な人間の支配管理を進める支配者大独占経営者たちのやり方に立ちむかい、町に地域に学園に職場に、自由で民主的、豊かな生活を創り広げる人々の世界をとらえ、表現し、伝える新しいルポルタージュ、文学の仕事をし、私たちがの力で、実現したいものである。